



由学校教師時代



小城ゆり子

中学校教師時代

小城ゆり子

十一月も終わりに近づいて、そろそろ年賀状を書く季節になった。M先生にも出さなくちゃと思っていたら、M夫人から喪中葉書が来た。M先生がお亡くなりになったという...

驚いて電話すると、

「十月の終わりにね、突然亡くなって。その前の日まで元気でしたのに」

「まあ、そうでしたか」

「安らかな笑顔でした」

「そうですか、それは何よりでしたね」

「小城さんのことは聞いていましたよ。ご著書も読ませていただきました」

私は自分の自費出版した本は、M先生にも送っていた。

「私、教頭先生のことはずっと尊敬していたんです」

「ありがとうございます、H中学で一緒だったんですね」

「そうです、いろいろご指導していただきました」

「H中学にはね、毒をもって毒を制するために送られたんだって言っていましたよ」

「そうおっしゃっていましたね。H中学にはT先生という共産党のボスがいる、頑固で、学校をぎゅうじっていたんですね。で、教育委員会も困って、M先生を教頭として送りこんだんですね」

毒をもってというのは、M先生も共産党だったのだ。でも、先生は硬直した考えの持ち主ではなかった。

「悲しいです...M先生のような立派な方が亡くなられて...あとで、お花をお送りしますので、お供えしてください」

「まあ、それはありがとうございます」

奥様と面識はなかったが、お悔やみの花は贈った。

私はもともと教師になるつもりはなかった。大学では教職課程はとったが、教師以外の職業なら何でもいいからなりたいなどと考えていた。というのは、私は両親とも教師なのだが、自分は小学校、中学校時代、ろくな教師に恵まれず、いつも、生徒にではなく教師にいじめられていたので、金輪際教師などという人種にはなりたくなかったのだ。

大学卒業後、小さな旅行代理店に勤めた。自分ではまじめに勤めたつもりだったけれど、「仕事にふさわしくない」と言われてクビになった。

失業して困っていたら、母が教師の臨時採用試験を受けるようすすめた。

「だって、私はいじわるな教師にばかり教えられてきたから、教師にだけはなりたくないのよ」

「そういうことは、お前が、そういう教師にではなく、良い教師になればいいことだろう？」

と言われて、そうか、と納得した。

採用試験に通って、H中学に赴任した。首都圏の近郊農村が住宅地になったばかりの田舎...そ

こは、荒れ果てた学校だった。昭和四十年代の後半のことである。

生徒の学習態度がなっていない。授業中、おしゃべりばかりする。勉強しようという気がない。世の中、民主主義だから、教師の権威などない。だから、授業を成り立たせるためには、力で生徒を押さえつけるしかない。若い女性教師には、荷が重かった。

いや、若い女性でも、生徒を押さえつける力のある人もいた。私は押しが強くなかった。性格的に、他人に対して、弱いのである。

私の両親は、高校教師だったから、中学教師に向いているのはどういう性格の者なのか、わかっていなかった。中学生たちが、どれだけ自分勝手に、わがままか、何もわかっていなかった。私は中学教師には向いていなかったのに、それが両親にはわかっていなかった。

英語の教師になって、初め、英文の読み方が早すぎると言われた。

「だって、ナチュラル・スピードというものがあるんです」

英米人は早口でしゃべるのだ。

「自分一人でわかってたってしかたないんだ、生徒は早くてわからないんだから」

と英語主任は言う。

ゆっくり不自然に英文を読まなければならないだろうか？

この英語主任は、変った教え方をしている、教科書を一切使わず、日本文を英文に直してしゃべらせていた。自分独特の考えがあるようだったが、その考えを私に教えてくれるわけではない。なんだかさっぱりわからなかった。

授業中、生徒がつまらないおしゃべりばかりする。いったい何をそんなにしゃべることがあるのか、ふしぎなくらいである。教師の教えることを聞いていない。いや、聞いている生徒もいるのだが、まわりがさわがしくてよく聞こえないため、授業内容が充分にはわからないという不満が残る。

騒がしくする生徒と、授業がよく聞こえないで不満な生徒。不満な生徒は「先生が悪いんだ」と考え、ますます不満をつのらせる。私は、授業していないわけではないのに、「月給泥棒」「税金泥棒」と言われた。

なぜ生徒たちが人の話を聞かずにしゃべりするのは、後になってわかった。ずっと後になって、教師をやめて子育てしている時、幼稚園の卒園式に行ったら、園児の後ろに立っている母親たちが式の途中、ぺちゃくちゃいらぬおしゃべりをする。うるさくて式にならない。また、バス旅行に行くと、添乗員さんが必要な伝達をしているのに、後ろでおしゃべりして聞いていない客がいる。大人たちがこうなのだ。子供がしつけられていないのもわかるというものだ。

もともと親が子供をしつけていないのに、すべて教師の責任にする。特に未熟な私の授業はひどかったので、一部の母親たちが数人して教育委員会に押しかけていき、あの教師をなんとかするよう、と要求した。私はその話を校長から聞いたが、教育委員会はそれ以上、私にどうこう言ってこなかった。教育委員会に押しかけたってどうにもならないのだ。

なんとか生徒を反省させようと、反省文を書かせると、先生のアスコが悪い、ここが悪いと、私の悪いことばかり書いてくる。

それでも、子供たちの英語の成績が特に悪かったわけではなかった。できない子も大勢いたけ

れど、できる子もいたし、大体が普通だった。

「先生ももっと厳しくしてください」

と母親たちに言われた。

もっと厳しくって、どういうことだろう？...どうしても、それがわからない。私がいくら生徒を叱っても、それは「厳しい」ということにはならないらしかった。

この学校に新しく赴任してきたM教頭に聞いてみた。

「もっと厳しくって、どういうことでしょう？」

「厳しくってのは、自分に厳しくするってことですよ」

「あ、そういうことですか？」

「そうですよ」

私は授業方法が未熟なのかもしれない、と思い始めていた。もっと授業を工夫して、楽しい授業にすれば、生徒たちものってくるのかもしれない...

英語の授業では、訳読式がいけないのかもしれない、と気づき始めていた。訳読式...英文を日本語に訳して教える...単純な文章から複雑な文章まで、訳読ばかり。私は中学校から高校、大学まで、訳読式の授業ばかり受けてきた。何でも翻訳さえすればいいのだった。外国語の授業とは、訳読式のものだけと思ってきた。大学では「英語教授法」という単位もとったが、そこでも訳読式の弊害は教えてもらえなかった。

会話と作文を中心に、英語で自己表現する...自己表現の英語教授法というのを、日教組の教研集会で習った。そして、私は教授法をいろいろ工夫してみた。授業はだんだん良くなっていった。

ところが、少しずつの進歩というのを見ない人もいる。

学年主任のT先生がぶりぶり怒りながら、「あなたの授業を見に行きますよ」と言う。

そして見に来て...授業中、半分、居眠りしていて...

「授業が成り立っていませんね！」と後で怒る。

うまくいった授業だったのに。

「価値観の違いです」と言ったら、

「あんな授業をされていて、価値観の違いとはなんだ！」とどなる。

自分が何かで機嫌が悪いのを私を叱りつけることで発散する。

M教頭が言った。「みんな、小城さんが悪い、小城さんが悪い、と言っていますが、他の人たちのもみんな、同じじゃありませんか」

T主任は、「他の先生の授業では子供たちは静かにしているのに、小城さんのときだけ騒がしいのはおかしいじゃありませんか」と言ったが、力で子供たちを押さえつけていけば、押さえつけない教師のときはその反動が来る、それは当たり前のことだった。

力で押さえつけるのではなく、おもしろい、楽しい授業を工夫していくこと、それだけしか解決法はないのだった。

M教頭は、がんばって、H中学校を改善していた。痴漢のまねばかりして女生徒に被害を加えていた体育教師には、痴漢行為を止めさせた。

私も教育への意欲に燃えるようになった。しかし、不運なことに、病気になってしまった。

病気が長引いて、教師を辞めざるを得なくなった。教育という仕事を辞めるのも、M教頭と別れるのも、とても残念なことだったけれど、私の教員生活は燃焼しきらないまま、終わってしまった。その後、結婚して、子育てして、今に至るのだが。

M教頭とはずっと付き合ってきたが、別れは避けられなかった。合掌。

了